



対訳で楽しむ 『女の一生』⁴

永田千奈

『女の一生』キャラ図鑑、今回は脇役特集である。駆け足で申し訳ないが、ジャンヌの父、叔母、息子の三人をとりあげる。

まずは、幼子を抱え、母を失い、夫を失ったジャンヌを支えた人物、父の男爵である。肖像写真のように徹底的な描写を得意とするモーパッサンだが、意外なことに、男爵の外貌についての描写は少ない。ただその精神性は際立っている。正義感が強く、当時としてはリベラルな思想の持ち主。だが、その善意はときに空回りする。「行動を伴わない理想主義者」なのだ。

Le baron Simon-Jacques Le Perthuis des Vauds était un gentilhomme de l'autre siècle, maniaque et bon. Disciple enthousiaste de J.-J. Rousseau, il avait des tendresses d'amant pour la nature, les champs, les bois, les bêtes.

Aristocrate de naissance, il haïssait par instinct quatre-vingt-treize¹⁾; mais, philosophe par tempérament et libéral par éducation²⁾, il exécrait la tyrannie d'une haine inoffensive et déclamatoire.

Sa grande force et sa grande faiblesse, c'était la bonté, une bonté qui n'avait pas assez de bras pour caresser, pour donner, pour êtreindre, une bonté de créateur³⁾, éparse, sans résistance, comme l'engourdissement d'un nerf de la volonté, une lacune dans l'énergie, presque un vice.

訳 シモン=ジャック・ル・ベルテュイ・デ・ヴォー男爵は、変わり者だが善良なる人物、いかにも革命以前の貴族といった人物だ。ジャン=ジャック・ルソーの熱心な信奉者であり、野原や森、動物達といった自然を恋人のようにやさしく愛している。

貴族の血を引く生まれゆえ、男爵は当然のように1793年に始まった革命後の恐怖政治を快くは思っていなかった。だが、気質の上では啓蒙主義の哲学者に傾倒し、教

育のうえでもリベラルな思想を教えられてきたので、彼は専制政治を憎悪していた。といっても、何ら攻撃的なものではなく、うわべだけの憎悪であった。

彼の最大の長所にして、最大の欠点はその善良さにあった。善良であっても、愛撫し、与え、抱きしめるといった行動力はない。もっと、とりとめのない、意気地のない、上からあわれみだけの善良さである。意志をつかさどる神経が麻痺し、エネルギーの欠落した、むしろ悪といっていいような善良さなのだ。

注 1) 1793年はルイ16世が処刑された年。2) naissance (生まれ)、tempérament (性質)、éducation (教育)と人格が形成されていくようその過程を時系列で追っている。3) 直訳すれば、「造物主的な善」だが、ここでは「神々しい」というより、むしろネガティブな意味で使われている。

彼の(当時としては)過激な思想は、ときに教会と対立を生み、ジャンヌを苦しめる。男爵が亡くなっても、ジャンヌは教会で葬儀をすることさえ許されなかったのだ。

もうひとり、陰でジャンヌを支えたのが男爵夫人の妹、「いてもいなくてもいい」リゾン叔母である。

Elle ne tenait point de place ; c'était un de ces êtres⁴⁾ qui demeurent inconnus même à leurs proches, comme inexplorés, et dont la mort ne fait ni trou ni vide dans une maison, un de ces êtres qui ne savent entrer ni dans l'existence, ni dans les habitudes, ni dans l'amour de ceux qui vivent à côté d'eux.

Quand on prononçait « tante Lison⁵⁾ », ces deux mots n'éveillaient pour ainsi dire aucune affection en l'esprit de personne. C'est comme si on avait dit « la cafetière ou le sucrier ».

訳 彼女は存在感が薄かった。まるで誰も踏み入らない荒地のように、親族の誰からもかまわれることなく、たとえ死んでも、家のなかに空白や欠落が生まれるわけでもなく、周囲に生きるひとたちの存在にも、習慣にも愛情にも何のかかわりをもたないひと、そんなひとがいる。彼女はまさにそうした人物だった。

リゾン叔母さんという言葉を口にしても、人々の心には何の感情も浮かんでこない。《コーヒーポット》や《砂糖壺》、という言葉と何ら違いがないのだ。

注 4) 彼女が目立たない人物だというだけでなく、そういう人は他にもいる、という含みがある。5) 叔母か伯母か。散々迷ったすえ、男爵夫人の保護者的な態度を理由に叔母と訳すことを選択。

ここまで存在感がない人物、話の筋に関係ない人物が、果たして必要なのかという

疑問も浮かぶが、ほとんど背景のような脇役まできっちり書くのがモーパッサンだ。
こうして父や叔母に助けられながら、ジャンヌは息子を育てる。

Il devint l'idole, l'unique pensée des trois êtres réunis autour de lui ; et il régnait en despote. Une sorte de jalousie se déclara même entre ces trois esclaves qu'il avait, Jeanne regardant nerveusement les grands baisers donnés au baron après les séances de cheval sur un genou. Et tante Lison, négligée par lui comme elle l'avait toujours été par tout le monde, traitée parfois en bonne par ce maître⁶⁾ qui ne parlait guère encore, s'en allait pleurer dans sa chambre en comparant les insignifiantes caresses mendrées par elle et obtenues à peine aux étreintes qu'il gardait⁷⁾ pour sa mère et pour son grand-père.

訳 今やジャンヌ、男爵、リゾン叔母の三人は、ポールを信仰の対象のように崇め奉り、常に彼のことだけを考え、彼を中心に暮らしていた。ポールは暴君として屋敷を支配していたのだ。ポールに仕える三人のあいだには、嫉妬のような感情さえ生まれていた。男爵がポールを膝のうえに乗せて乗馬ごっこで遊んだあと、派手なキスをしているのを見ると、ジャンヌは心中穏やかではなかった。これまで皆から認めてもらえなかったリゾン叔母は、まだ言葉すら話せないポールからも相手にされず、ついには使用人と同じ扱いを受けるようになり、自室でこっそり涙していた。何しろ、母であるジャンヌや、祖父の男爵にはしっかりと抱きつづのに、自分はずかかなふれあいを求め、ようやくさわらせてもらえるような状態なのだから。

注 6) despote と esclaves、maître と bonne で主従関係を強調。7) 愛情を出し惜しみしているようなニュアンス。

さて、次は息子のポールだが、甘やかされて育ったため、勉強嫌いのうえに、お調子者。儲け話に乗っては借金をつくり、ジャンヌに金をねだる。まさに「放蕩息子」の王道を行く人物である。そのお馬鹿ぶりがうかがわれるのが家出先から母ジャンヌに宛て書き綴る手紙の数々だ。そのなかの一通を紹介しよう。

« Ma chère maman, n'aie pas d'inquiétude. Je suis à Londres, en bonne santé, mais j'ai grand besoin d'argent. Nous⁸⁾ n'avons plus un sou et nous ne mangeons pas tous les jours. Celle qui m'accompagne, et que j'aime de toute mon âme a dépensé tout ce qu'elle avait pour ne pas me quitter : cinq mille francs ; et tu comprends que je suis engagé d'honneur à lui rendre cette somme d'abord. Tu serais donc bien aimable de

m'avancer une quinzaine de mille francs sur l'héritage de papa, puisque je vais être bientôt majeur ; tu me tireras d'un grand embarras.

訳 「親愛なるお母様、心配しないでください。僕は今、ロンドンにおり、元気です。でも、お金がなくて非常に困っています。僕たちは本当に一文無しで、日々の食事にも事欠いています。僕は今、ある女性と一緒にいます。僕が心から愛する女性です。彼女は、僕と離れまいとして、全財産を使ってしまいました。ぜんぶで5千フランです。お母様、僕は人間として恥かしくないよう、まずは彼女にこの金を償わなければなりません。そんなわけで、父の遺産から1万5千フランほど都合していただけませんか。僕ももうすぐ成年ですから、父上の遺産を受け取る権利があるはずですよ。お母様、僕を助けてと思ってお願いします」

注 8) Je で始まった手紙が Nous に変わり、「おや」と思わせたところで、「愛する女性」の存在が明らかになる。

要するに、「母さん、俺だよ。うん、元気。でも、金がなくて困ってるんだ。彼女の手前、カッコつかないから、何とかしてくれよ。親父の遺産、あるんだろ」というオレオレ詐欺まがいの手紙である。ジャンヌはそれでも送金し、ついには財産を使い果たす。そんなジャンヌを助けて現れたのが……。次回はどうぞお楽しみに。

お月様のかたち

家出した息子ポールを探し、パリに来たジャンヌがレストランに入ることもできず、ベンチで「月の形をした小さなパン un petit pain en forme de lune」を食べるシーンがある。はて、月には満ちかけがある。満月と三日月では「月の形」にも大きな違いがある。それからしばらく、人に会うたびに月の形で何をイメージするか、聞いて回った。ちなみに日本人は、「月見そば」「萩の月(仙台の銘菓)」に代表されるように、満月を思い浮かべる人が少なからずいた。だが、フランス人は皆、「月の形は三日月の形。真ん丸なら、お日様の形だ」と口をそろえる。そうか、三日月型かと納得したところで、今度はこれを「クロワッサン」と訳していいものか、悩む。あわてて、本を繙くと、諸説あるようだが、クロワッサンがフランスで食べられるようになったのは、1850年ごろとある。Une vieの刊行は1883年。そうか、当時、すでにクロワッサンは存在していたが、その呼称はモーパッサンが小説に名詞として用いるほど定着していなかったのではないかと、というのが私の推理、いや推測である。

※ 原文は Une vie, Le Livre de Poche 版から引用。

※ 訳文は拙訳『女の一生』(光文社古典新訳文庫)を使用。